



ボクだけの女神姉妹

羽沢向一

illustration ©有子瑤一

美少女文庫
FRANCE & SHOIN



快晴の青空で、ド——ンッ！ と爆音が轟いた。とどろ

町中の人間が空へ顔を向けると、雲ひとつない晴天の蒼穹そうきゆうから、稲妻が地上へ向かって翔かけてくる。ありえない気象現象に人々が目を見張る前で、奇妙に赤みがかった稲妻はまっすぐに高層マンションに落ちた。

「うわあつ！」

さくらのいもりあき
桜井森明は悲鳴をあげた。ひとりで乗っていたエレベーターのなかに赤い光が満ちたかと思うと、鉄の箱が大きく揺れた。操作板の1の数字に灯っていた光が消えて、エレベーターが停止した瞬間に、小さい体が背後に投げだされる。

後頭部が硬い壁に激突して、大怪我を負う。
はずだった。

実際には、やわらかい感触に後頭部と背中が埋まっていた。今ではほとんどしないが、母親に抱きついたときと似た感触だ。森明の小さいながらも持っている男としての本能が、このままやわらかいものに体をあずけていたいと訴える。

同時に、心地よい感触の正体を知りたくなった。やわらかさから離れないように密着したまま、体の向きを反転させてみる。

「うっ」

顔が、すべすべした二つの柔軟なボールの間に埋まった。

「うわわ！」

目の前に、というよりは、森明の視界すべてを埋めつくしているのは、女の人の小麦色の大きな胸だ。エレベーターの床に片膝をついた女の人の白い服の、大きくVの字に切れこんだ胸からあふれる乳房の谷間に、顔を埋めている。

森明はあわてて女の人から離れた。異性の身体に触れることが特別の意味を持ち、恥ずかしくなる年齢になったばかりだ。たちまち子供らしい顔が真っ赤に色づいてしまう。

恥ずかしがりながらも、森明はじつと相手の姿を見つめてしまった。

テレビ以外で、こんなに美しい女の人を目にするのは生まれてはじめてだ。近所にも学校の先生にも綺麗な人はいるけれど、目の前にいる人とはレベルが違う。

（外国の人かな）

と、思った。どう見ても日本人ではない。顔も、身体も、日本人ではけっしてありえない鮮やかな小麦色の肌だ。床にまで流れる長い髪は、夕焼けの空のように赤い。瞳は黒い宝石のようにきらめき、どういいうわけかチラチラと金色の光が瞬いて見えた。またた鼻はすらりと高く、唇は肉感的に厚く、横幅が広い。校長先生のような怖さを感じ

るが、それ以上に強烈に目を引きつけて離さない魅力にあふれている。

魅力は、顔だけではない。森明の視線は磁石に吸いつけられるように、小麦色の美貌から小麦色のボディへと移動した。

（すごいや。すごく大きい）

女の人は、森明の知る唯一の言葉で表現すると、すごくエッチな服を着ていた。一枚の大きな白い布で身体を包んだだけの服だ。森明がテレビで見た『アルゴ探検隊の大冒険』や『タイタンの戦い』というアメリカ映画に出てくる女の人の衣装に似ている。素材はただの布に見えるが、濡れてもいないのに身体に貼りついていて、身体の輪郭も、肌の色も、透けて見える。

胸は広く開いて、森明が知っている誰よりも大きな乳房の半分があらわになっている。たわわに実った小麦色の果実は、今にも服からこぼれ落ちそうだ。少しでも身体をひねれば、左右どちらかの乳首が見えてしまうだろう。

腹の真んなかにはトランプのダイヤの形に穴が空いていて、滑らかな小麦色の肌と、縦長にくぼんだへそがのぞいている。

美しい曲線を描く腰から下は、足首まで透けた布が覆う。膝を床についた右脚も、立てた左脚もむっちりとして、息を呑むほどの迫力だ。ストッキングもソックスも履いておらず、素足の先に黒い革を編んだサンダルを履いていた。

見知らぬ外人の女に見とれる森明の耳に、くせのある、しかし美しい響きの日本語が聞こえた。

「桜井森明が選ばれた」

声は背後からだ。驚いて振りかえると、そこにも二人の女の人が立っていた。

美しくエキゾチックな顔も、迫力のプロポーションも、エッチな白い服も、ひざまずいている女の人とまったく同じだ。

(三つ子!?)

としか思えない。そうして、今まで思い浮かばなかったのが不思議な当然の疑問に気づいた。

(エレベーターはぼくしか乗っていなかったのに……とまってから一度も扉は開いていないのに……どうやって三人は入ってきたんだろう!? もしかして、幽霊?)

考えたくない疑惑に冷や汗をかきはじめた森明に、最初からひざまずいている女の人が告げた。

「わたしの名はクロートー。紡ぐ者」

別の女の人がひざまずき、森明へ語った。

「わたしの名はラケシス。測る者」

最後のひとりも片膝を床について、森明へ名乗った。

「わたしの名はアトロポス。断つ者」

同じ顔の同じ唇が、綺麗にハーモニーを奏でる。

「わたしたちはモイライ。運命を定める者」

言葉の意味はさっぱりわからない。ただ三人の女の人が普通ではないとはわかった。森明の短い人生経験で知った現実とは異質なものだ、小さい本能が認めた。

「な、なに？ おねえさんたち、なんなの？ うんっ！」

森明の口を、ひとりが口でふさいだ。

「んんんっ！」

（キスだ！ ぼく、知らない女の人にキスされてる！）

生まれてはじめて知る女の唇の感触、それも熟した大人の女の唇と自分の唇を重ね合わせる感触は、子供には予想もできない心地よさだ。

未知の気持ちよさが呼びこむ混乱で、ファーストキスの相手がクロートーか、ラケシスカ、それともアトロポスなのか、わからなかった。元々完璧にそっくりな三人の区別など、全然つかないのだが。

目を丸くして、言葉を失う森明の唇と前歯を、モイライのひとりの舌が舐めまわした。たっぷりと唾液の乗った舌で、口の内外をねぶられる。

（気持ちいい！）

森明は胸の内でうめいた。大人がキスをしたがる理由がわかった。ただ唇をくつつけるのではなく、舌を使うなんて。それがこんなに気持ちいいなんて！

幼い顔をうつとりとゆるめる森明の口から、透明な唾の糸を引いて、女の口が離れた。間髪を入れずに、別の同じ顔の唇が、森明の唇に重なる。また舌が入ってきた。

二人目の舌は、もつと遠慮がなかった。一人目にさんざん舐められた前歯の間を抜けて、もつと奥へと入ってくる。

「んえっ！」

森明の口から驚嘆の声がもれる。舌先を、舌先で撫でられる。

（舌が、女の人の舌が、口のなかに入ってきてる！）

心底驚く子供の口のなかで、モイライの舌が巧妙に動いた。森明の舌先は何度もつつかれる。

「うんっ、んん……」

どう反応していいのかもわからず、森明の舌は、口の奥へと縮こまった。

女の舌は我がもの顔でさらに口内へと進撃して、蛇が獲物をとらえるように森明の舌に巻きついてくる。強く、弱く、緩急をつけて、舌が舌に締められ、しごかれる。はじめて舌がとてもぬるぬるしていて、驚くほど力強いものだと知らされた。

女の舌が蠢くたびに、森明は密着する二人の唇の隙間から声をもらった。

「くうっ、んあああ」

子供を喘がせている二人目の女も、デュエットのように甘ったるく情熱的な吐息といきをこぼしてくる。

「んふっ、はんんん」

とろりとした女の声さえも、森明には気持ちがいい。幼い知識では、まだ女があふれさせる吐息の意味はわからないが、聞いているだけで耳の穴や鼓膜を舐められているみたいだ。自分の口のなかで鳴る濡れた摩擦音も加わって、いよいよ気持ちよさを増進させる。

「んふ。んふふふ。はあっ」

含み笑いと熱い吐息を残して、二番目の唇が離れた。ぼってりとした唇の外に出たままの舌から、女自身と森明のものが混ざった唾液が、たらたらと滴したたり落ちて、あらわな胸の谷間に川を作った。

「ふわああ」

と、吐息をこぼし、口内に残るキスの余韻にぼんやりとする森明の顔の前に、またすぐに三番目の唇がやってくる。

「むうっ、んんん」

「ふふふ」

また女の舌が、森明の齒の奥に侵入してきた。今度は舌を伝わらせて、口のなかに新鮮な唾液が流しこまれてくる。生まれてはじめて他人の唾を味わい、口のなかから驚愕のパルスが発せられて、脳を激しく揺るがした。

（甘い！ 温かい！ おいしい！）

他人の唾を呑むなんて、汚いとは思えない。それなのにモイライの唾はどうしようもなく甘く、無意識に喉を鳴らして呑みくだしてしまう。

「はあああ」

「んふっ」

深い吐息といきとともに、男の子と大人の女の口が離れた。多量の唾液が流れ落ちて、二人の胸をべつとりと濡らす。

強烈な三連続キスが終わると、新たな驚きが待っていた。森明の両手が二人の女の人につかまれて、同時に胸の谷間に差しこまれる。豊かな乳房が作る深い深い谷間は、やすやすと小さな手を呑みこみ、たとえようもなく快い圧迫感でとらえた。

「なっ、なななな」

森明は驚いて両手を引き抜こうとしたが、びくともしない。すでに森明の手首をつかむ指は離れている。四つの乳房に挟まれているだけなのに、手を動かさなかった。

（普通じゃない！ おかしいよ、これ、うひゃっ！）

最後にキスをした女の人が再び顔を近づけてきて、森明の右の耳たぶをしゃぶった。また思いもよらない未知の気持ちよさが生まれる。

「見なさい、桜井森明」

三人の声が重なると、エレベーターの四方のクリーム色の壁が消えた。森明はマンシヨンのなかの狭い空間から、別の広い場所に移動していた。

森明は悲鳴をあげる。平和な日本の小学生が目にするには、あまりに恐ろしい光景が周囲に展開されていた。戦争だ。それも銃や爆弾や戦車を使う戦争ではなく、剣と盾と槍を使う戦争だ。

幼い眼前で、兜と鎧に身を包んだ屈強な男たちが、相手の腹を斬り裂き、胸を貫き、頭を叩きつぶしている。ドラマや映画の作りものではない。金属がぶつかる音と知らない言葉の怒号で、耳をふさがれる。濃密な血の臭いが鼻を突く。正真正銘の殺し合いだ。

戦場の喧騒のなかにあってもはつきりと聞こえる声で、女たちは次々と言葉を紡ぎ、糸を成した。

「見なさい。この惨いありさまを」

「見なさい。この無為に散る命を」

「見なさい。栄光とは名ばかりの愚行を」